中座遺跡群分布調査報告書

昭和62年3月

津和野町教育委員会

序　　文

津和野町は，有形，無形の文化財や記念物などが数多く存在し，史跡の町として著名でありますが，埋蔵文化財については，現在までに本格的な調査実績が有りません。過去，僅かに，個人による踏査と遺物の表面採取が行われており，それらの成果をもとに，全国遺跡地図（文化庁編集）へ分布の登載がなされている実状であります。

その様な状況の中で，今回，中座地区のほ場整備事業の計画がもちあがり，当該地における埋蔵文化財分布調査についての確認調査をすすめることになりました。

この調査は，国・県の補助を得て実施したものですが，調査にあたっては，島根県教育委員会文化課を始め，島根大学，山口大学の格別のご指導とご援助をいただくことができ感謝いたしております。

地表調査や試掘調査の結果，当該地区には，かなりの規模と内容を持つ遺跡が確認されました。今後，更に調査をすすめてまいりたい考えでありますが、いずれにしても，郷土の歴史を知る上で，貴重な資料になるものとよろこんでいます。これを機会に，町民の間に，文化財に対する一層の理解と関心が高まることを願うものです。

この調査並びに本書発行にかかわっていただきました多くの皆様方と，土地所有者および近隣の方々に厚くお礼申し上げごあいさつといたします。

昭和62年３月

津和野町教育委員会

教育長　　中　島　　巖

第1章　は　じ　め　に

1．調査に至る経緯

本町の埋蔵文化財の分布調査については，過去実施されておらず考古を探る上での学術資料は非常に乏しく僅かに元津和野高校教諭の岩谷建三氏（故人）の踏査による表面採取報告に頼る他ない現状にある。尤もこの中座地区は津和野では早くから開けたと云われており，周辺では数点の遺物が収拾され，文化庁刊行全国遺跡地図に載る周知の遺跡となっている。

昭和59年津和野町では，大字中座地区のほ場整備事業の計画がもちあがり，当該地区の埋蔵文化財の分布について照会を求められた。本地区は，津和野川流域に接するなだらかな丘陵地であり南北にそれぞれ桂川，南谷川が添って流れている。ほ場整備事業はこの地区を中心に周辺17*ha*に及ぶ造成工事となり遺跡の範囲及び性格の調査が急務となった。本調査は，はじめ地表調査を中心に行ないこれについては，島根大学の田中義昭教授を中心に学生十数名があたりその後，試掘調査は山口大学の中村友博助教授を中心とした山口大学考古学教室にお願いした。

地表調査は昭和61年９月26日～28日まで行ない，試掘調査は昭和61年10月１日～７日までの間行なった。

2．調査委員会

次のメンバーで調査委員会を組織した。

調査委員長	津和野町教育委員会教育長	中島　巖
調査指導委員	島根大学教授	田中義昭
	山口大学助教授	中村友博
	島根県教育委員会文化課	松本岩雄
	山口大学人文学部	吉田　寛
	津和野町文化財保護審議会長	釈川兼光
調査員	島根大学法文学部学生	
	山口大学人文学部学生	
調査補助員	津和野高等学校郷土部	
事務局	津和野町教育委員会文化財係長	長嶺常盤

会　議

昭和61年６月16日	中座遺跡分布調査第一回調査委員会
昭和61年７月５日	中座遺跡分布調査説明会
昭和61年12月18日	中座遺跡分布調査第二回調査委員会

第2章　試掘調査の成果

1．調査の概要

試掘調査は，分布調査の一環として，昭和61年10月１日から同７日まで実施した。試掘地の撰定にあたっては，丘陵先端を第一の候補地にすべきとする田中義昭委員の助言に従い，該当の大字中座字山崎の地内を中心とし，それよりも低位の平坦面と高位の丘陵傾斜面を選ぶこととした。試掘は，平面２ｍ×２ｍの試掘溝（以下，これらのテスト・ピットを略してＴＰと称する）を稲の刈り取りが終ったばかりの田畠に，計12箇所開掘して，終了した。

結果的には，圃場整備計画の予定地の北半に調査が片寄り，谷の上方の知見をうるに至らなかった。この点は，留意していただきたい。ＴＰの設定地が山崎地内に多いのは，下文で述べるように，この地内で遺構・遺物を検出したためである。この件は，今回の試掘調査の成果であって，今後はこの地区を山崎遺跡として特定することとし，より広域な中座地区については中座遺跡群として扱うことがよい。

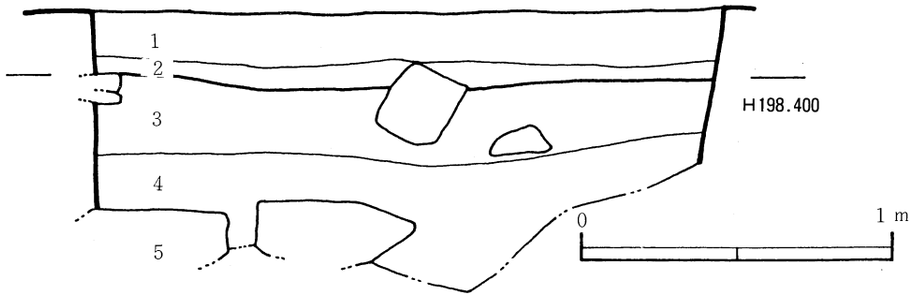
各ＴＰの配置は，別図のごとくである（第１図）。ＴＰの設置に，国家座標系は用いていない。低位面には２箇所のＴＰ（１・５）を設けた。この面の表土は，黒土であり，山口線寄りの民家近くで磨製石斧（第15図）が採集されている。ＴＰ２は，今回調査した箇所で，もっとも高い場所にあたる。この水田ないし，隣接田より遺物の出土した伝聞がある。ＴＰ３・４，６～12は山崎遺跡に設けたものであり，南西から派出する丘陵の先端部にあたる。ＴＰ３を除く，各調査区の位置関係は，町道路面に設けた基準線方向を用いて原点に対して２ｍ×２ｍの直交座標にのっとる。

なお，この試掘調査は山口大学から下記の者が参加したほか，松本岩雄委員（島根県教育委員会文化課）も指導にあたられた。中村友博（人文学部助教授），吉田寛（修士１年），久野孝一・馬場道則（学部３年），風間忠雄・小畑三秋・西川徹・西田厳・舟橋加恵・前田晴美・村上智裕（学部２年），および考古学専攻学生。

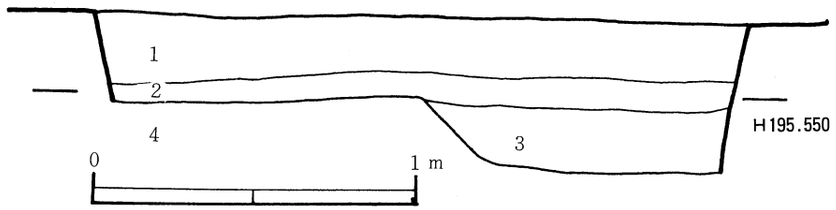
（中村友博）

第１図　調査区（ＴＰ）の配置図（１：5000）

12箇所のＴＰのうち，ＴＰ１・５は北に南谷川をのぞむ河畔に，ＴＰ３・４，６～12は山崎遺跡に，ＴＰ２は山麓に位置するので，３箇所に分けて概略を述べる。

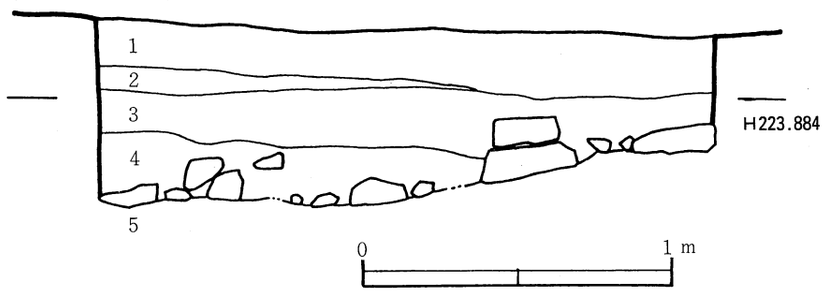


第２図　ＴＰ１の層位図：１耕作土，２床土，３黄褐色砂質土（以下，自然堆積），４明褐色砂質土，５礫層。



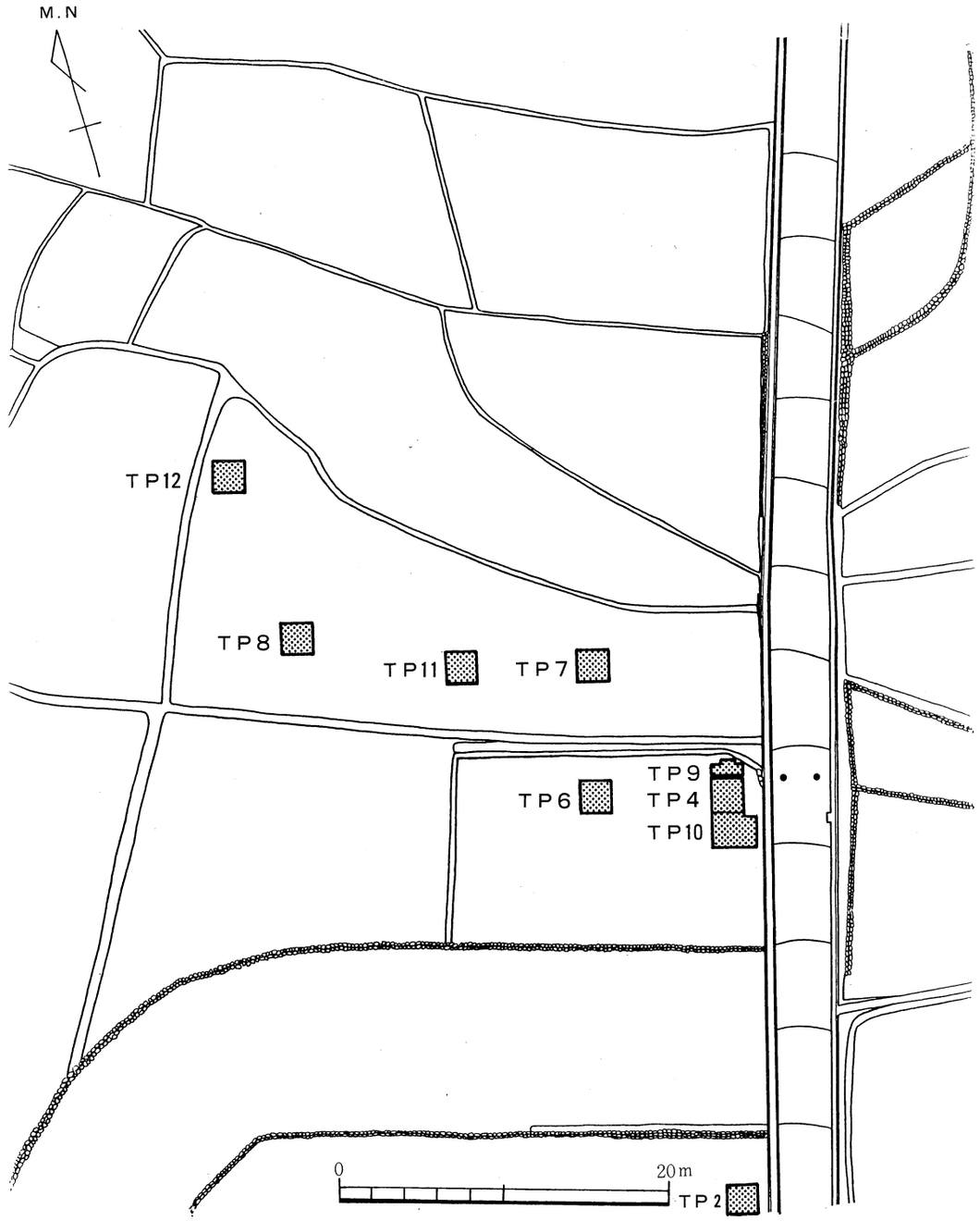
第３図　ＴＰ５の層位図：１耕作土，２床土，３黄色砂質土，４明黄褐色砂質土(自然堆積)

ＴＰ１・５　ＴＰ１の現地表高は，198.60ｍ（第２図），ＴＰ５の現地表高は，199.80ｍ（第３図）。耕作土は，黒色有機土で，厚さ約30㎝。耕作土の直下は，含礫黄褐色砂の段丘堆積物となる。遺構はない。



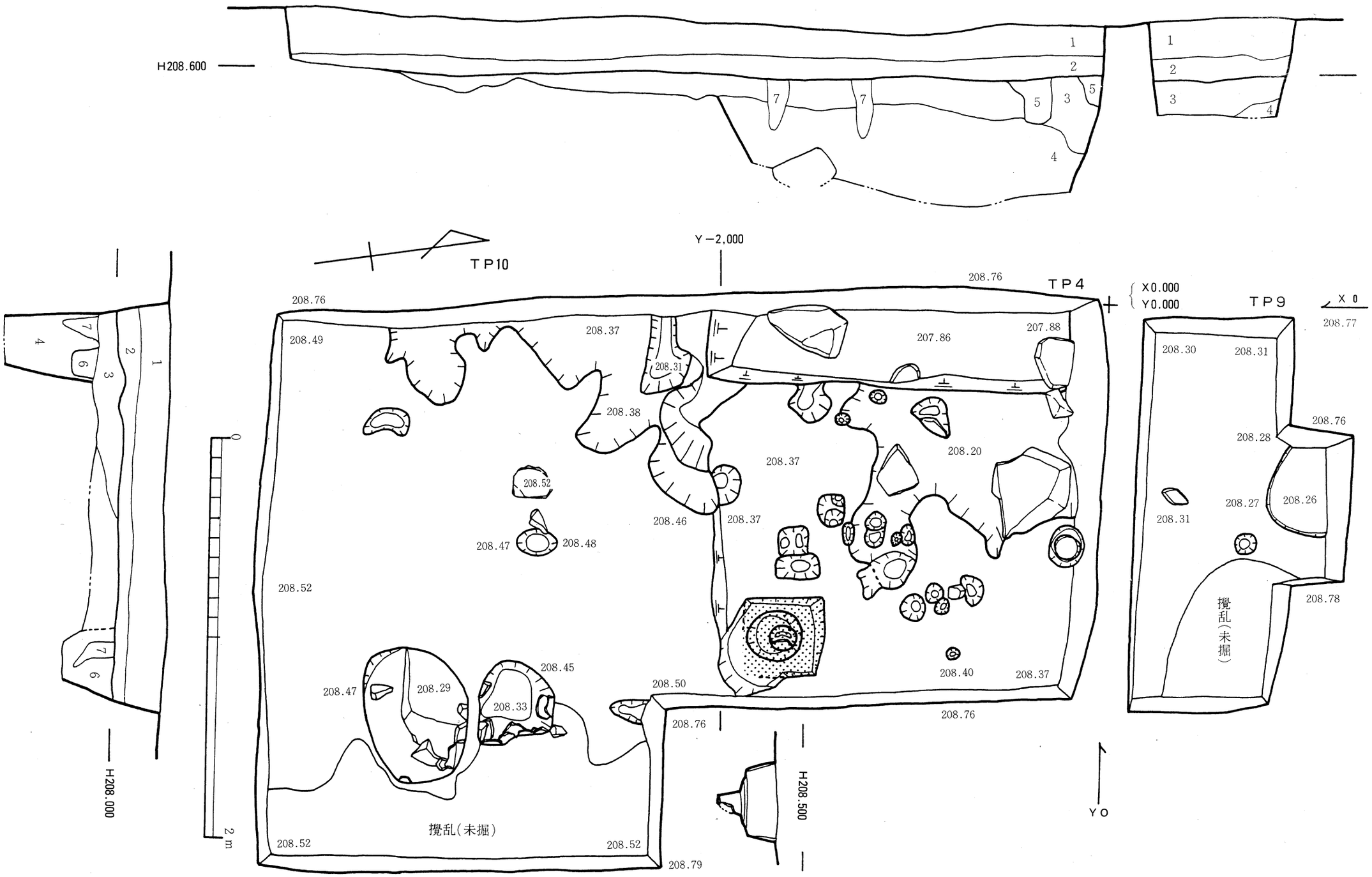
第４図　ＴＰ２の層位図：１耕作土，２床土，３黄橙色粘質土（客土か），４橙色粘質土（客土か），５礫層

ＴＰ２　今回設定した調査区で（第４図），もっとも高位（現地表高：224.15ｍ）にあり，付近で遺物が出土したとの伝聞がある。水田床土の下に黄橙色粘質土，橙色粘質土があり，地表下40／60㎝で，岩塊にあたる。岩塊は基盤岩の風化したものである。北の川方へ著しく傾斜堆積する。黄橙色土，橙色土は風化土壌の可能性もあるが，地権者の談話からすれば，客土の可能性が高い。遺跡があったとしても，侵食・亡流している。



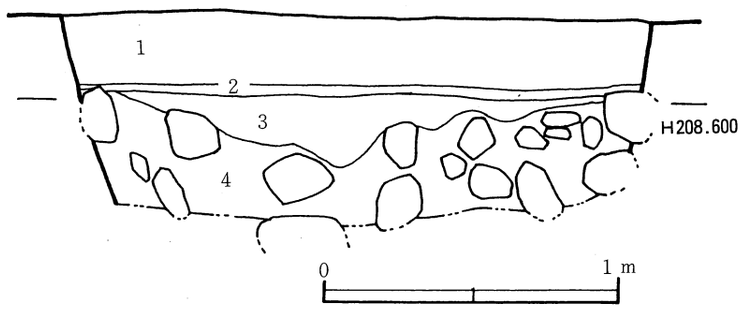
第５図　山崎遺跡の調査区配置図

山崎遺跡　中座の丘陵が津和野川に派出する丘陵突端に位置し，現状ではアスファルト舗装の町道で囲まれた半月形の地区にあたる。それぞれ高度のちがう三筆の水田面に９箇所の調査区を設けた(第５図)。



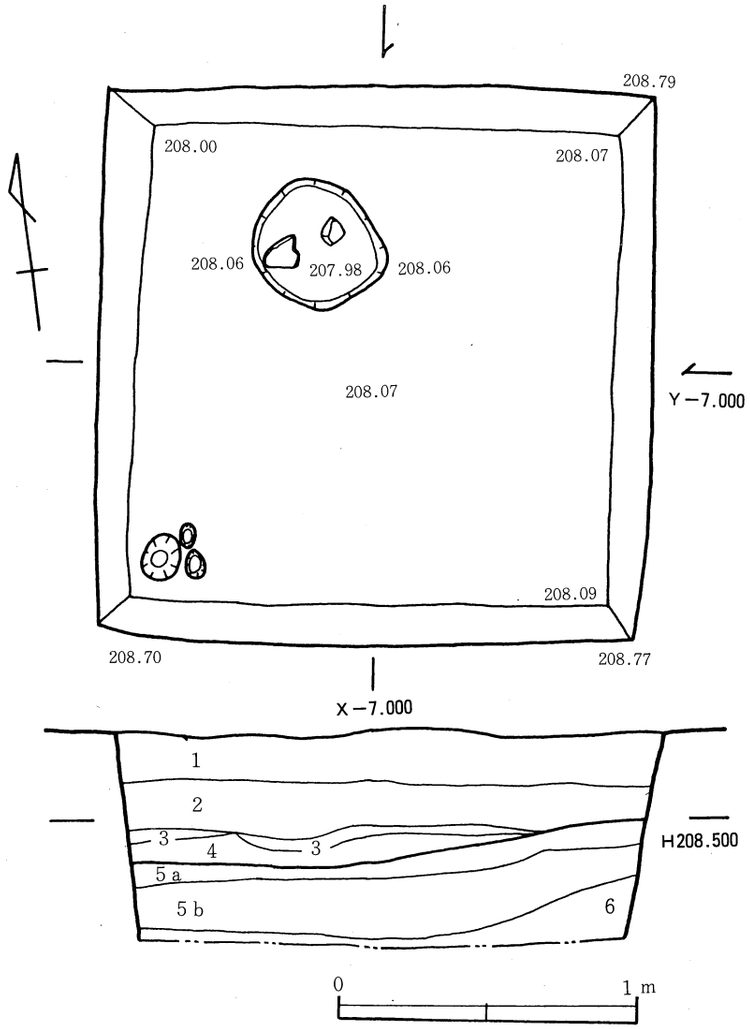
第６図　ＴＰ４・９・10の平面と層位図：１耕作土，２床土，３暗褐色粘質土（上面で遺構検出），４黄褐色粘質土，５黒褐色粘質土（遺構埋土），６茶褐色粘質土（遺構埋土），７樹痕

ＴＰ４・９・10　道路脇に設けた南北方向の連続する調査区（第６図）現水田面高は，208.80ｍ。地表下30㎝で，遺構検出面にあたる。遺物包含層は，たいへん薄く，南の山方ではこの区で尖滅する。検出した遺構は，ＴＰ４の南西隅で一辺40㎝の矩形の堀形をもつ掘立柱立建物もしくは塀の柱穴である。中央に径15㎝の丸柱痕跡がある。矩形堀形の一般的知見から，奈良時代，平安時代初頭の所産であろう。大きさから言って大規模建物ではなく，民家，雑舎，仮設屋の類とみられる。この柱と対になる柱穴を確認するため南北にＴＰ９・10を拡張したが，対応柱穴は検出できなかった。その他，ＴＰ４・９・10に10基ほどの小円形穴がある。ＴＰ４の北壁にかかる一基は，円形柱堀形であるが，時期不明。その他は，小土坑，生物痕跡，撹乱土坑である。包含層から須恵器，土師器の小片が出土したが，時代が特定できる遺物の出土はない。



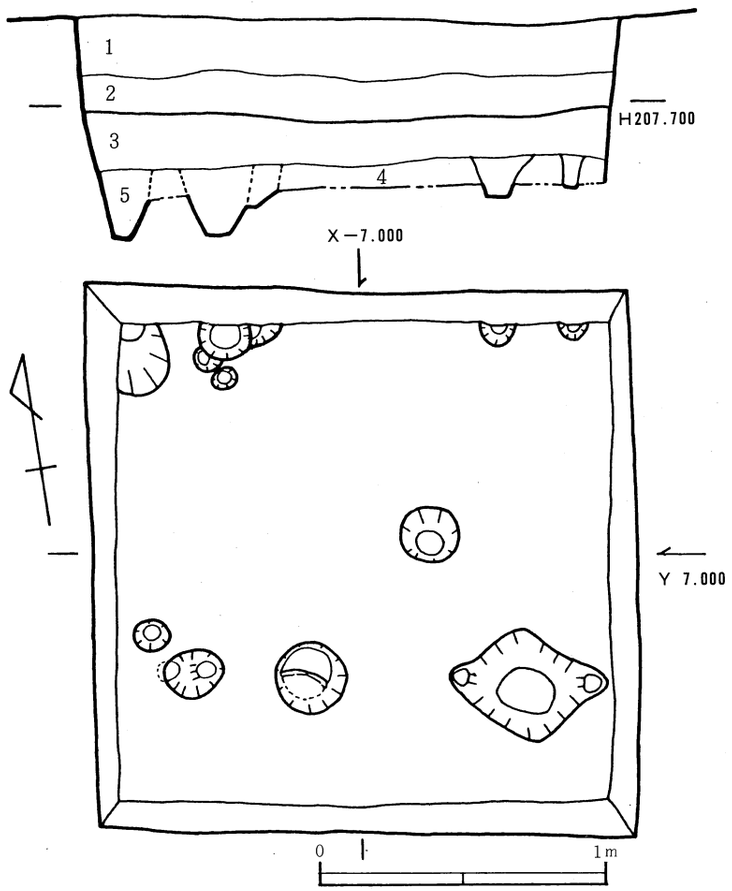
第７図　ＴＰ３の層位図：１耕作土，２床土，３黒灰色粘質土（客土），４含礫黄褐色土（自然堆積）。

ＴＰ３　現高度210.65ｍ（第７図）。水田床土の下に，客土の黒褐色粘質土があり，つづいて上面凹凸のはげしい岩塊にあたる。基盤岩塊の高度，210.40ｍ。遺構なし。



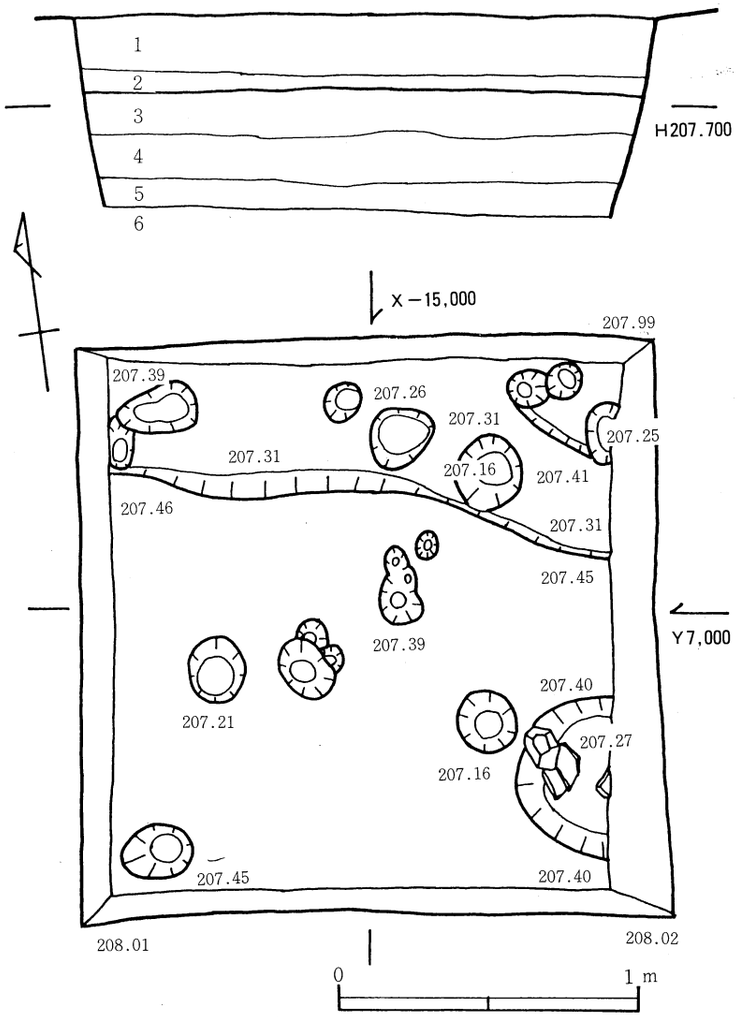
第８図　ＴＰ６の平面と層位図：１耕作土，２床土，３黒色焼土，４灰褐色粘質土（客土），５ａ・ｂ暗褐色粘質土（遺物包含層），６黄褐色粘質土（自然堆積，上面で遺構検出）。

ＴＰ６　前記ＴＰ４・９・10と同筆の水田に，西に離れて設けた調査区である（第８図）。遺構検出面は，黄褐色粘質土上面で，高度は208.20／10ｍ。ほぼ円形の柱堀形２基を検出した。黄褐色土の上には，層厚30／40㎝の中世遺物を含んだ遺物包含層が堆積する。

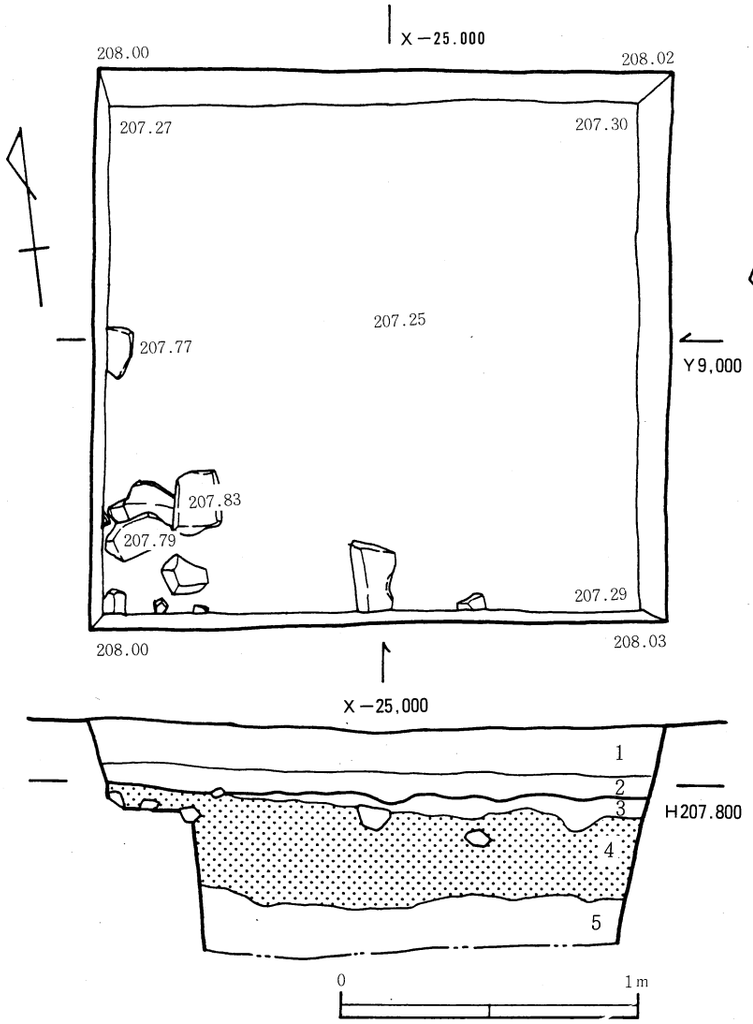


第９図　ＴＰ７の平面と層位図：１耕作土，２床土，３暗褐色粘質土（遺物包含層），４黄褐色粘質土（自然堆積，上面で遺構検出），５黒褐色粘質土（遺構埋土）。

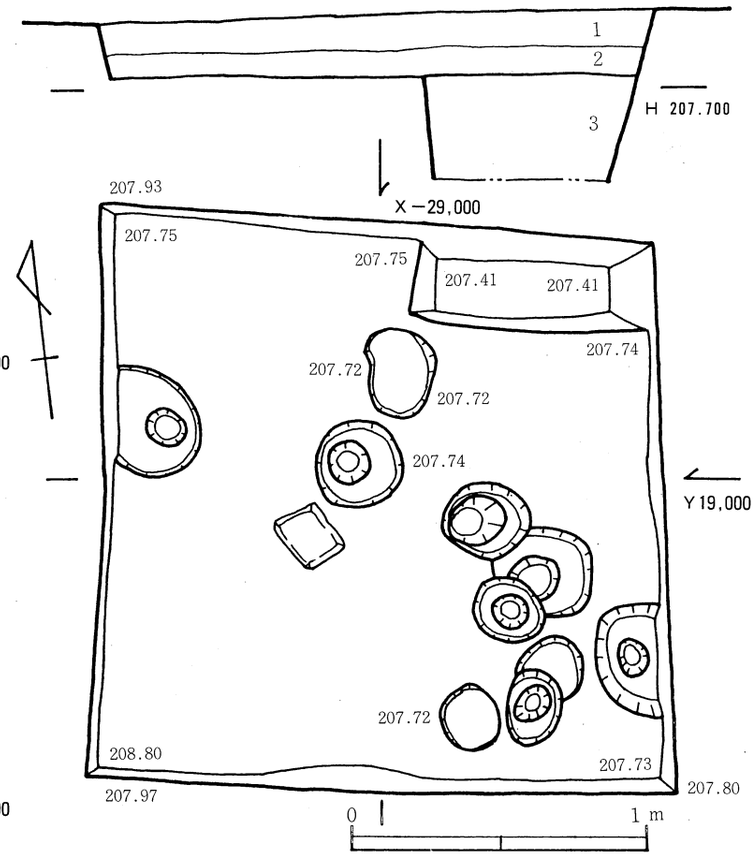
ＴＰ７　ＴＰ７・８・11・12を北隣の水田面に設定した（第９図）。現水田面高は，208.00ｍである。高度207.50ｍの黄褐色粘質土上面で，遺構を検出した。小規模な柱穴と一辺30㎝の矩形平面の土坑がある。遺構検出面の上には，層厚20㎝の中世ないし古代の遺物包含層がある。ＴＰ６と同一の堆積状況と考えられる。



第10図　ＴＰ11の平面と層位図：１耕作土，２床土，３暗褐色粘質土（遺物包含層），４茶褐色粘質土（遺物包含層），５黒褐色粘質土（遺物包含層），６黄褐色粘質土（自然堆積，上面で遺構検出）。



第11図　ＴＰ８の平面と層位図：１耕作土，２床土，３茶褐色粘質土（遺物包含層），４黒色粘質土（遺物包含層），５黄褐色粘質土（自然堆積）。

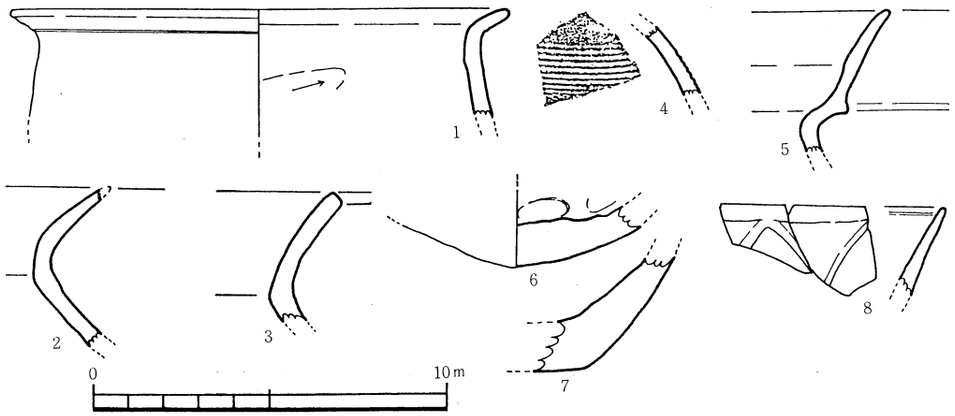


第12図　ＴＰ12の平面と層位図：１耕作土，２床土，３黄褐色粘質土（自然堆積，上面で遺構検出）

ＴＰ11　床土直下の高度 207.70 *m*から遺物包含層となり，高度207.40 *m*の黄褐色粘質土上面で遺構を検出した（第10図）。遺構は10基ほどの円形穴であるが，東南の径50㎝ほどの土坑からは弥生時代後期の土器が出土した。遺物包含層は３層からなり，下層は須恵器をまじえないようである。

ＴＰ８　今回の試掘中，もっとも興味深い堆積状況が見られた（第11図）。水田床土直下に，黒色有機土が，層厚30㎝で堆積し，高度 207.40 *m* の基盤の黄褐色粘質土と不整合に接する。黒色有機土の上面，調査区西南に人頭大の集石があるが，性格は判らない。黒色有機土はきわめて良好な遺物包含層で，弥生時代終末・古墳時代初頭の土器片と石器遺物を多く含む。

ＴＰ12　今回の調査区中，もっとも川方に設けた調査区（第12図）。床土直下は，高度 207.75 *m*の黄褐色粘質土の基盤となる。10基ほどの小型円形の柱穴堀形を検出したが，中央の１基から須恵器小片が出土したほかは，時代を特定できるものはない。遺物包含層はない。



第13図　試掘調査で出土した土器：１～７ＴＰ８出土，８ＴＰ３出土。

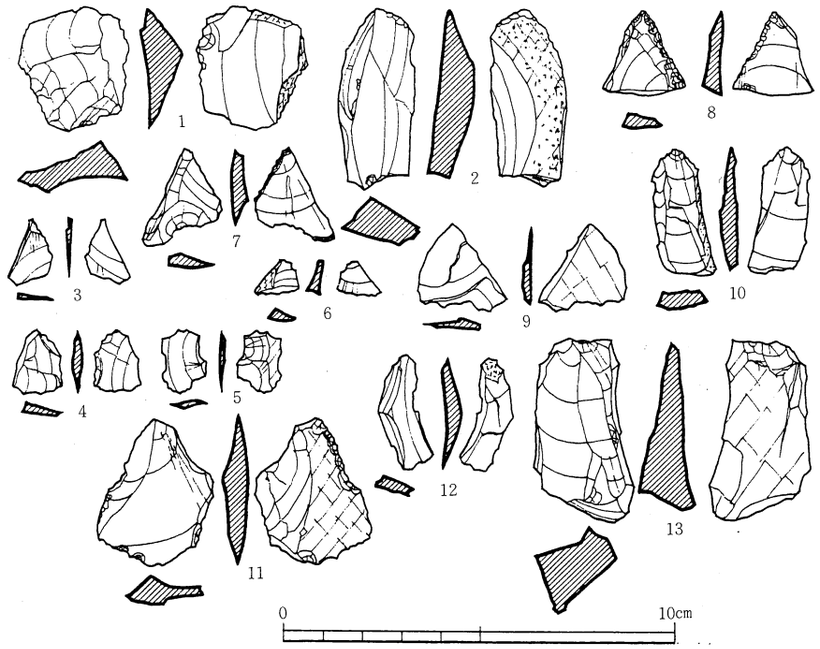
山崎遺跡から出土した土器　１～７はＴＰ８第４層（黒色粘質土）の出土である。１～３は甕形土器で，頸部に細い沈線を有し，内面に削りを施すもの(1)，内外面にナデを施し，口縁端部を丸く仕上げるもの(2)，及び端部に面取りを行うもの(3)がある。４・５は複合口縁壷で，色調・焼成の具合から同一個体である可能性もある。４は肩部付近の破片で，九条を一単位とする櫛状施文具によって施された直線文と波状文の一部が認められる。内面には削りが行われている。５は口縁部の破片で，内外面ともナデを施す。６・７は底部で，内面に指頭痕を有する丸底(6)と不安定な平底(7)がある。以上の土器片はいづれも赤橙色を呈し，焼成は良好である。房宗寿雄氏[1]のＶ期前後に相当し，弥生時代終末から古墳時代初頭に位置づけられる。

８はＴＰ３第２層（水田床土）から出土した龍泉系無鎬蓮弁文青磁碗の口縁部である。外面には鎬のない蓮弁を彫り出し，内面の口縁端部付近には一条の細い沈線を施す。地は灰白色，釉は緑灰色を呈し，焼成は良好である。横田賢次郎氏・森田勉氏[2]による分類のＩ－５ *a* 類に相当し，13世紀中葉前後に比定できる。

注

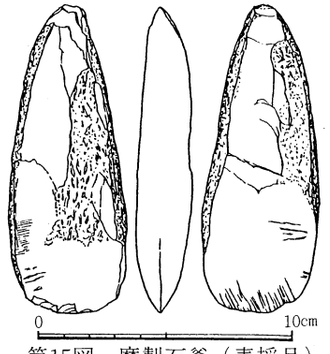
(1)　房宗寿雄「『山陰地域』における古墳形成期の様相」（『島根考古学会誌』第１集　1984年）

(2)　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について ― 型式分類と編年を中心として ― 」（『九州歴史資料館研究論集』４　1978年）



第14図　試掘調査で出土した石器：１ＴＰ２出土，２ＴＰ３出土，３～６ＴＰ７出土７～12ＴＰ８出土，11ＴＰ10出土，13ＴＰ11出土。

試掘調査で出土した石器遺物　試掘した調査区から，13点の剥片を採集した。ほかにＴＰ７床土から出土した擦石とみられる一点があるが，自然礫の可能性もあって図示していない。



第15図　磨製石斧（表採品）

１はチャート製の石核。山崎遺跡とは別地点のＴＰ２の耕作土から出土したもの。丘陵斜面の高い位置では，遺構は浸蝕のため流亡しているが，遺物の散布が認められる。２以下は山崎遺跡からの出土品。２は安山岩製の剥片。遺構が浸蝕・流亡したＴＰ３で出土した。８～10は山崎遺跡のＴＰ８黒色粘質土から出土した。８はチャートの細部調整剥片。10はチャートの石刃。９は安山岩製の剥片。この包含層からは，弥生時代終末から古墳時代前期の土器が得られていて，石器を共伴することはありえない。したがって，ＴＰ８の黒色粘質土は，再堆積層と判断される。山崎遺跡から出土したその他の剥片も，古代・中世の柱穴遺構をおおう包含層，床土から出土したもので，原位置を失なっている。柱穴掘方の深さから言って，山崎遺跡の旧地表は，撹乱・浸蝕を50㎝内外受けているとみられる。　（吉田　寛）

2．試掘調査のまとめ

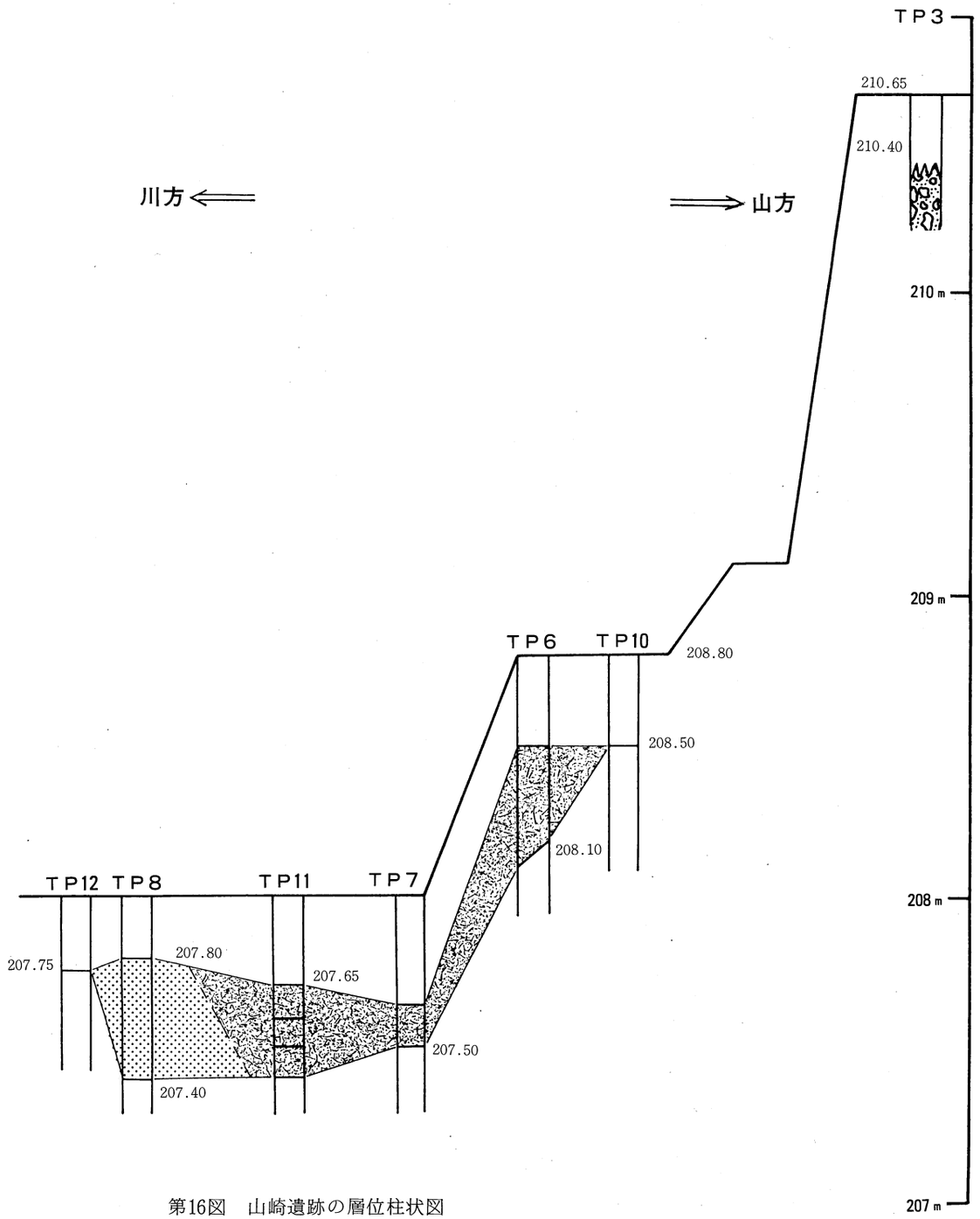
今回，中座遺跡群で試掘調査をした地点は，圃場整備が計画される対象地のいずれも北半であって，まだ相当広域な面積が考古学的な発掘調査所見のない空白部分として残されている。

山崎遺跡のある段丘より低位に，南谷川を臨む平坦面があって，２箇所の調査区ＴＰ１・５を設けた。この面の表土には，黒土が発達しており，磨製石斧の採集がなされている件から，表土の黒土そのものが，遺物包含層ではないかとみられる。

上位の段丘面にある山崎遺跡では，低位面の表土を形成する黒色土をみない。ただ山崎遺跡のＴＰ８で看取した第４層黒色粘質土は，低位面の地表堆積物に相当する可能性がある。山崎遺跡の試掘結果を，山方から川方へと柱状図で結ぶと別図のごとくなる（第13図）。川方ＴＰ12の基盤高度が高いことから，旧地表は現在と違い，西方で津和野川に開口する浅い凹地，旧谷があったのではないかとみられる。ＴＰ８の黒色粘質土が竪穴住居の覆土でないとすると，この包含層は，西方に延びてゆく可能性が高い。田中義昭委員から，黒色土の性質は火山灰ではないかと助言をいただいたが，そうすると山崎遺跡の段丘面で旧地形の凹地に局地的に残ったものである。この凹地は中世には，埋没を完了していることが，出土遺物から判る。要するに，弥生時代末から中世にかけての遺構が，重複して旧谷面に残っているというのが結論である。それ以外の場所は，浸蝕によって削平されており，遺構の有無は，判断できない。遺構は，深い柱穴が30㎝ほどであるから，上面が包含層の形成と同時に，浸蝕・削平されている。しかし，遺構の検出が可能な範囲は，包含層の拡がりよりも広く，現高度で209.00 ｍ以下の水田面が対象となる。

山崎遺跡は，弥生時代終末／古墳時代前期の遺物包含層と矩形の柱掘方から推定される古代，円形の柱掘方から推定される中世の掘立柱建物からなる歴代遺跡である。顕著な遺物包含層である黒色粘質土の全面調査をふくめ，周辺の精査が今後の課題である。

（中村友博）



第16図　山崎遺跡の層位柱状図